

京都府地球温暖化防止活動推進センター通信

STOP! GLOBAL WARMING

うおーみんぐ

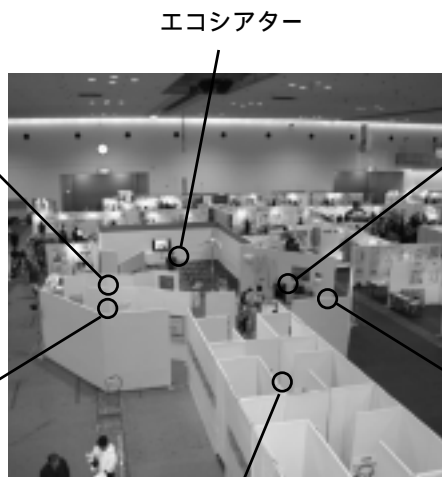
LET'S WARM UP OUR ACTION

平成17年
冬号
~ 第7号 ~

地球温暖化問題に取り組む人のための通信です。
実践活動への意欲を、アイデアを、仲間同士の関係を、ホットに温めます！



温暖化の影響の写真展示



エコシアター



日常生活での温暖化防止の工夫を紹介するスペース



生活と温暖化のつながりを考えるゲーム

温暖化クイズ



「夜の地球」の写真展示 他
(協力：JCCCA)

写真：京都環境フェスティバル2005のテーマゾーンの様子

京都府温暖化防止センターは、京都府などとともに「京都環境フェスティバル2005」を主催しました。その会場には「テーマゾーン」を設け、クイズ(+迷路)、ゲーム、展示などで、温暖化の原因や影響、対策についての情報を発信しました。(関連記事：4～6面)

CONTENTS

巻頭特集

かしこいクルマの使い方を考えるプロジェクト2005
～モビリティ・マネジメントの取り組み～2～3

Report 京都環境フェスティバル2005
「Road to 2050 脱・温暖化を目指す若者たち」...4～5
「片山右京氏トークショー」.....6

報告：MOP1 in モントリオール
京都議定書の完成、そして続く7
活動レポート 他.....8

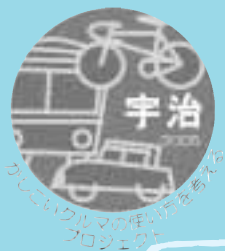


京都府地球温暖化防止活動推進センター

Kyoto Center for Climate Actions

京都府地球温暖化防止活動推進センターは、府内の温暖化防止活動を様々な面からサポートし、一層活性化させることを目的に活動するセンターです。平成15年10月10日、府内の多様な団体が連携し新たに立ち上げたNPO法人京都地球温暖化防止府民会議が京都府知事からセンターとしての指定を受け、その活動を開始しました。

京都府地球温暖化防止活動推進センターの活動は、国、京都府、府内の多様な団体、会員の皆様などのご支援によって支えられています。



かしこいクルマの使い方を考えるプロジェクト京都2005

モビリティ・マネジメントの取り組み

京都府交通対策課 村尾俊道氏

プロジェクトの実施結果（概要）

アンケートには、宇治中心部の約150事業所に通勤する3,000人が参加

アンケートと情報提供を通じ、通勤時間帯の交通状況が変化
朝の通勤時の宇治市中心部の鉄道利用客数が約3割（29%）増加
JR宇治駅・京阪宇治駅・近鉄大久保駅の定期券外の降車人数の合計を比較

事業所周辺では朝の通勤自動車の交通量が減少、徒歩が増加
宇治壱番交差点：7:30～8:30北行乗用車 25%減少（665台 500台）
南北方向歩行者 36%増加（214人 290人）

インターネットでの取り組み（約240名）では、より細かく分析
参加者の自動車利用が9%減少、二酸化炭素排出量が14.4%削減
自動車分担率：87.1% 78.4%、CO2排出量：1,140kg/週 976kg/週

外出時に自動車を利用しようという意識が低下した人が17%
10種類の外出局面で自動車を選択する割合 6.6回 5.5回

かしこいクルマの使い方を考えるプロジェクト京都

クルマは、私たちが好きな時に好きなところへ快適に移動することを可能にしました。

一方で、クルマの増加は大気汚染、温室効果ガスの排出、交通渋滞、交通事故などの問題も投げかけています。

最近の調査では、人々の移動は徒歩からクルマへの転換が進んでおり、昼間の買い物や用事、子供の送迎といった利用も増え、高齢者の免許保有率もどんどん高まっています。

居住地の郊外化の進展と相まって大型店の郊外化やロードサイドショップの立地が進み、冷蔵庫の大型化によるまとめ買いが習慣化するなど、今や私たちの生活にクルマはなくてはならないものになっています。

しかし、便利だからといって、ごく近くのコンビニにもついついクルマで行ってしまうような習慣が出来ていませんか。

クルマを1時間使えば、1日のCO2排出量は2倍以上になります。クルマを1時間使う代わりに公共交通を使うと、消費するカロリーは2倍ほどになります。クルマの使い方を見直すことは環境や健康にも良いし、外気に触れることで季節を感じることも

出来ます。また、クルマの維持費は結構かかりますし、何より事故を起こすリスクも相当な確率になるようです。

そこで、京都府では、府民の皆さんと一緒に過度なクルマ利用を考えるきっかけを作る取り組みとして「かしこいクルマの使い方を考えるプロジェクト京都」を東京工業大学の藤井聡助教授と大阪大学の松村暢彦助教授にご指導をいただきながら進めています。

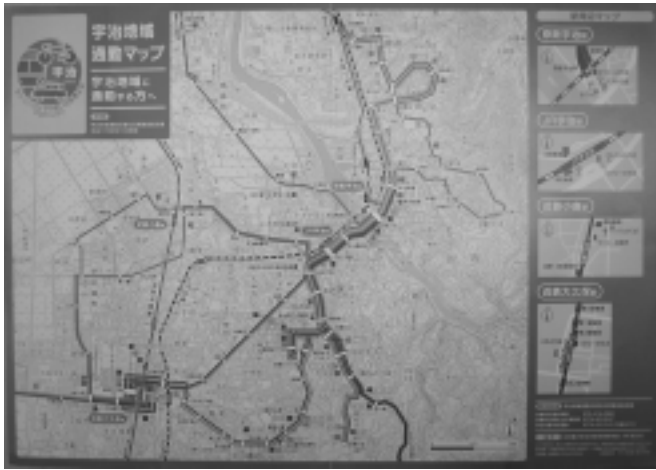
モビリティ・マネジメント

クルマを使っている人に「どうしてクルマを使っていますか」と尋ねると、おおよそ次のような反応が返ってきます。

- 1)クルマ以外で行くなんて考えたことがない。
- 2)クルマ以外を使っただけの行き方がわからない。
- 3)どうしてクルマ以外で行かなくてはならないの？

そうなんです。こうした反応にコミュニケーションを通じ、ひとつずつ答えていくことにより自発的に交通行動を転換していただく手法がモビリティ・マネジメントです。

クルマ通勤の方に公共交通の地図



画像：通勤マップ（左）とその裏に印刷された時刻表（右）

や時刻表を配布し、クルマ以外で行くならどういう方法があるか、何時のバスに乗れば良いかといった情報を提供。クルマ利用を控えると環境にも健康にも好影響を及ぼすことを知ってもらおう。試しにやってみませんか！と呼びかける。

こういった取り組みが90年代後半からイギリスやオーストラリアで始まっており、国内でもいくつかの事例が出てきているのです。

宇治地域通勤交通社会実験

（かしこいクルマの使い方を考えるプロジェクト宇治 2005）

クルマがどこからどこへ走っているかを調べてみると、京都市と周辺部の往来が多いのはもちろんですが、京都市の南部を環状方向に走るクルマが相当あり、宇治市を目的とするクルマ利用もかなり多いことがわかりました。

また、宇治市宇治地域へは鉄道駅から比較的近いエリアでもクルマの利用が多く、宇治橋西詰交差点から市役所方面にかけては通勤時に渋滞が起こっています。

そこで、宇治商工会議所や地元企業と行政、交通事業者、京都府地球温暖化防止活動推進センターの皆さん

と一緒に、この地域に集中する通勤自動車対策を行うことにしました。

具体的には、宇治地域に立地する商工会議所会員企業（約150社）の従業員約5,000人の皆さんにアンケート用紙を配布。自動車通勤の方には、クルマ以外で行くとしたらどうすれば良いかを考えていただきました。また、通勤時に使える時刻表や鉄道・バス路線図を載せた「宇治地域通勤マップ」と、クルマと環境や健康、渋滞の問題を取り上げた小冊子を同封しました。

さらにユニチカ宇治事業所、任天堂宇治工場、宇治製菓、宇治市役所、府振興局の5つの事業所では、モニターを募りインターネットによる自動車通勤を考えるコミュニケーションアンケートも実施しました。

実施結果

お陰様でアンケートには3,000人を超える方に回答をお寄せいただきました。また、アンケートを実施する前後で交通量を比較した結果、鉄道利用ではJR宇治駅、京阪宇治駅、近鉄大久保駅の定期外の朝の通勤時利用者が約3割増加したほか、事業所周辺では通勤自動車が減り、徒歩が増加。インターネットを利用した

アンケートでも参加者の自動車利用が減少し、二酸化炭素の排出量が削減され、自動車利用の意識が低下するなどの結果が出ています。

多くの方がクルマと環境・健康について考えることで、自発的に交通行動を変えていただき、アンケートでは公共交通に対する意見やクルマ利用を抑制するヒントをたくさんいただきました。環境や地域に対する皆さんの意識は高く、そのきっかけを提供することで、納得して交通行動を変えてもらえることを実感しました。

今後は、いただいた御意見を分析し、使いやすく、便利な公共交通ネットワークづくりに引き続き取り組んでいく予定です。

このほかにも、京都府南部の6つの女性団体等に協力いただいて進めている「おでかけマップづくり」（昼間のお出かけに便利な情報を集めた地図）や小学校での取り組みなど、いろんな場面で、いろんな人たちに「かしこいクルマの使い方」を考えてもらうきっかけづくりを進めており、京都府地球温暖化防止活動推進センターにも御協力をいただいています。環境的に持続可能な交通社会、豊かな京都府づくりに引き続き御協力をお願いします。



パネリスト



滋野浩毅さん
(京のアジェンダ21フォーラム事務局コーディネーター)



豊田陽介さん
(NPO法人 気候ネットワーク)

田中: 活動に関わったきっかけと、今後の持続性・継続性について聞かせてください。

滋野: 町なみが変わり、地域固有の文化が失われるのを感じて「自分にどんなことができるか」と考え始めたのが「京のアジェンダ21フォーラム」などの活動に関わるきっかけです。正直、会社をやめることには不安はありましたが、「今しかチャンスはない」と思い、活動を開始しました。

私は、「失われた十年」は、経済的には落ち込みましたが、地域を大切にするような人々の意識が芽生え育った時期でもあったと思うんです。2050年に私自身が生きているかどうかはわかりませんが、社会は、地域固有の文化・アイデンティティをさらに感じるようなものになるんじゃないかな、と思っています。

豊田: 田舎に生まれ育ち、自然に触れてきました。これが原体験だと思えます。実践力をつけるために大学院に行こうと思い教授に相談すると、気候ネットワークを紹介されました。「ボランティア活動なんて偽善的だ」という思いがあったのですが、実際に活動

を始めると、多様な人が参加していること、また、ボランティアが人のためだけにやるものではなく、自分が得るものが非常に多いことが分かったんです。気候ネットワークの存在意義はまだまだ大きく、今後も継続的に活動を続けていくことになりましたが、私個人については、2050年くらいには故郷に帰って活動するのもありかな、などと考えています。きっと「最近の若者は！」なんて言う、口うるさいおじいさんになっているはずですよ！（笑）

田中: なるほど。「やらねばならない」という思いだけでは継続できませんよね。活動の中で、「喜び」を感じられることが重要なのですね。

小鹿: 京都府内の農家の方々等が中心となり、衣食住に渡って地域の素材を大事にしようという取り組みをすすめる「京都自給ネットワーク」という団体があります。この団体でスタッフとして活動していると、ひとつの目標をとっても色々なアプローチがあり、色々な価値観があることが分かりました。若者だからできること、それは、今ある価値観以外の価値観で物事を捉えることだと思えます。活動の中では、

学習や体験活動と並行して、表現活動としてのアートを重視しています。なぜアートをやっているかという、決まった価値観がないからです。この評価方法が環境問題＝自給自足にも必要だと思うのです。イベントを単なるイベントに終わらせるではなく、その場を通していろいろな価値観を知ってもらうことで次のステップに進むきっかけを提示したいと考えています。

佐々木: 実行委員として関わった学園祭のごみの量をみてショックを受けたのがきっかけです。一昔前は、「大学のイベントの環境対策」と言うと変人扱いされたものです。個々の活動では孤独感もありますし、「自分がやらなきゃ」という重たい責任感もありますが、イベントなどで同世代の多くの人と交流することでモチベーションが上がり、また頑張れます。エコリーグの意義はそこにあると思っています。個人としての継続に関して言えば、色々な人の話を聞いていると社会人になっても環境活動を続けられるかどうか不安になってきますが、なんとか継続したいと考えています。

田中: 次に、温暖化に具体的にどのよ

・温暖化を目指す若者たち～

日時：12月11日 14:00～15:30

主催：京都府地球温暖化防止活動推進センター

企画協力：NPO 地域環境デザイン研究所 ecotone

環境省の「都道府県センター普及啓発広報事業」の補助を受けて実施しました。



小鹿ゆかりさん
(NPO 法人
京都自給ネットワーク)



佐々木義仁さん
(エコリーグ
(全国青年環境連盟))



田中聡さん
(株式会社エフエム京都「
STATION」代表取締役専務)



太田航平さん
(NPO地域環境デザイン研究所
ecotone 代表理事)

うに取り組んでいくのかについて聞かせてください。

豊田：温暖化問題はエネルギー問題です。私は、省エネに加え、自然エネルギーを利用することが必要な選択肢だと考えています。その方法として、エネルギーの消費者から生産者になることが重要です。太陽光発電設置、市民風車づくり、ペレットストーブの利用などにより、地域の特性を活かし、地域らしさを取り戻し、地域の活性化や雇用の創出にもつなげながら温暖化対策ができるはずですよ。

滋野：私は今日、この会場まで自転車で来ました！京都の町は、平坦でコンパクトにまとまっており、自転車の利用に向いています。自動車利用をへらし、自転車や公共交通機関に切り替えていくことが、私たちの生活の中でできる対策だと思います。また、ものづくりに関して言えば、新しい技術に頼るだけでなく、必要以上のものをつくらないという産業構造をつくることをやりたいです。

太田：平安神宮の初詣で、参拝者に容器の汚れを落として分別してもらおうと

いう社会実験をやったことがあります。露天商や警察からは「うまくいかないのでは」という声もでしたが、話し合いを進めて実現しました。実際にやってみると、ほとんどの方が洗ってくださったんです。「しかけづくり」をすることで人を動かすことができるとわかりました。

田中：地域らしさ、京都らしさをだすことが重要です。「京都からの発信」という視点で話を聞かせてください。

滋野：考えているのは、環境が「京都ブランド」になりうるのでは、ということ。観光や伝統工芸品も、長い歴史の中で洗練されて京都をイメージするものになっていますよね。環境に関しても、京都議定書ができたことで、ライフスタイル、家のづくり、観光の形態などのあらゆる面に環境の視点を取り入れられ、いろいろな人の目にふれることで2050年くらいまでに京都ブランドにまでなりうるのではと思うのです。

田中：私も、環境は京都ブランドになりうると思っています。ここで「欲望としての環境」を提案したいです。こ

れからの時代の欲望として、環境を大事にする生活が豊かでブランド性があると認識されることが必要だと思うのです。現在は、時代＝価値観の大きな変わり目だと思います。そんな中、京都的なライフスタイル、自然や環境を大事にするライフスタイルが見直されている時代と言えます。

あと、私の仕事(FM局)の関わりで言えば、音楽も表現手段としてのアートですし、実際に地球温暖化などの環境問題をテーマに発信したいというミュージシャンも少しずつ増えてきています。アートは問題解決の答えを示してくれる訳ではないですが、問題解決のために大いなる力を与えてくれる、このことが重要だと思います。

会場：今日は、若い人たちの話を聞いて力強く感じました。私は2050年には生きてはいませんが、今日の話聞いて、安んじてあの世へいけると思いました(笑)。特に、「やらねばならない」だけではなく、持続・継続できる社会を目指さなければならないと強く感じました。私も、環境を保全できる社会を、喜びや楽しみをもってつくれるようにしていきたい。今日は参加できて良かったです。

僕は子供の頃から、歩荷(ポッカ)の仕事を手伝いながら登山に親しんできました。F1引退後も何かに挑戦したくて登山に挑戦しています。11月には、ヒマラヤにあるアマダプラムに行ってきました。そういうところに行くと、車が環境に与える影響が切実であることに気が付き、環境問題について考えさせられます。たった35年前に氷河が6キロ下まであったところが、今ではアイスフォール帯となっていたり、下まで雪がなくなっているところもあります。それでも、5000mのベースキャンプから見る夜空は、6等星まではっきり見えるので、天の川が2本に分かれ

ているのもわかります。今の日本では、大気汚染やネオン等などによって見えなくなってしまっています。

地球温暖化は、もっと身近な問題のはずなのに、まだまだ対岸の火事のように思われているところがあります。僕は、松本恵二さんの誘いをきっかけに、一番身近に走っているディーゼル・エンジン車とてんぷら油を原料とした燃料「C-FUEL」を使って、レースに参戦することになりました。この燃料は、燃費もパワーも普通の燃料と変わらなく、硫黄酸化物もほとんど出ません。ヨーロッパでは、こうした燃料を使うことが当たり前になっていま

す。自分が運転している車が、地球の空気を汚していないんだと思うと、新たな使命感が生まれてきます。



片山右京さん

1963年生。F1に6年間連続参戦、日本人最多出場を記録すると共に、1994年、当時の日本人予選最高位である5位を記録。数字以上に記憶に残るドライビングが多くのファンを魅了した。1999年ル・マン24時間耐久レースでは日本人チーム初の総合2位の獲得に貢献。2005年パリダカではクラス3位入賞。

片山右京氏と蒲田充弘氏(丹後の自然を守る会)との対談

蒲田: 僕たちのNPOが、片山右京さんとともにレースに参加できたのは、(株)レボ・インターナショナルの越川社長とのつながりがきっかけです。「みんなで集めた油から作られた燃料でレースに出たいな」と言ったところからはじまりました。片山さんは、実際に乗られてどう感じましたか。

片山: 純粋なF1チームの車とは違うけれど、みんなが一生懸命作った車と、皆の集めたてんぷら油の燃料でレースに出られたことには、言葉に表せない充実感がありました。

やはり「車と環境」というのが、自分にとっての大きなテーマです。ハイブリッド車のような技術も大事ですが、CO₂排出量が1990年から1割以上増加している中で、皆がいろいろな取り組みを同時に行わないと間に



合わない。近い将来、こうした燃料を使うことは日本でももっとメジャーなものになってくるでしょう。その際、しっかりした品質の燃料を使うことも重要です。

蒲田: 京都市では約900箇所、廃食用油の市民回収が進んでいます。府北部地域でも集められた廃食用油を使って、ゴミ収集車が走っています。片山さんがレースに出られたことも起爆剤となって、回収場所が増え続けています。役場に置いてある回収BOXでは、役場に用が来た人などによって、1ヶ月に30~40リッター程度集まります。

北部では、下水道の普及率がまだ低いので、排水はそのまま海に流れてしまいます。埋めると肥料になると勘違いしている方もおられます。その辺の意識を変えていながら、燃料として使っていくことで循環型社会の促進に繋がってほしいです。

片山: 京都は、議定書という歴史的な1ページを刻んだまちです。あと70年で地球の気候が危機的な状況になると危惧する科学者もいるなかで、「その頃、僕たちはもう生きていないからいいや」ということでは済まないで、少しでもブレーキをかけるために、京都のみなさんに熱くなって頑張ってもらいたいです。

<丹後の自然を守る会 概要>

NPO法人丹後の自然を守る会では、丹後地域と阿蘇海の保全を目指して、廃棄物とされてきた廃食用油を回収している。そして、京都市にある燃料精製会社(株)レボ・インターナショナルと協力して、自動車燃料に資源化する取り組みを行っている。



MOP1 in モントリオール

京都議定書の完成、そして続く！

浅岡美恵（京都府温暖化防止センター運営委員長・気候ネットワーク代表）



写真提供：IIGC

カ ナダ第2の都市モントリオールで京都議定書第1回締約国会合と、気候変動枠組条約第11回締約国会議（COP/MOP1）が開かれました。議定書を批准した条約の締約国は既に155ヶ国に及んでいますが、米国は条約だけに加盟し、京都議定書は拒否したままです。

モ ントリオールはオゾン層保護のためのモントリオール議定書でも世界に知られる美しいまちです。日本の北海道の最北端くらいの高緯度にあり、戸外は身を切るような寒さでしたが、4万人の市民が会議の成功を求めてマーチをしました。COP3の時の平安神宮前に集まった日本の市民のパレードを思い起こさせる光景でした。こうした市民の熱い思い、カナダ政府やディオン議長（環境大臣）の熱意が実り、今回の会議は大変意義のあるものとなりました。今後の長い温暖化への国際社会の取組でも、COP3京都会議と並ぶ重要な決定がなされたのです。

第1 に、2005年2月に発効した京都議定書は法的に完全に整い、実施されることになりました。2001年のマラケシュ合意文書全部が正式に採択されたのです。日本が遵守制度について議定書を改正して法的拘束力を持たせることに反対したため、この問題はMOP3に先送りされましたが、国際法では強制執行ということはほとんど考えられず、排出量取引やクリーン開発メカニズムなど京都メカニズムと呼ばれる取引制度の利用に遵守が必要条件となるため、遵守制度は現実的には担保されていると言えます。COP3からの8年の道のりはこの日のためにあったのです。

第2 に、「2013年以降も京都議定書が続く」ことが明らかになりました。京都議定書は、2008年から2012年までの第1約束期間に先進国の法的拘束力のある削減数値目標を盛り込んでいます。しかし、米国や日本の国内の一部からも、「京都議定書は死んだ」といわれたり、「After KYOTO」などといって、2013年以降は京都議定書ではないかのような誤解をもたらす表現が広

がっていました。そうすると、第1約束期間の目標も事実上、崩壊してしまいかねません。しかし、モントリオール会議で、2013年以降の第2約束期間の目標について、第1約束期間との間に空白をもうけないように交渉していくことが合意されました。当然、第1約束期間よりも大きな削減が求められるでしょう。「京都議定書は2013年以降も続く」というメッセージは産業界や各国、地方自治体、市民にとっても、大変重要な意味をもっています。早く、しっかりと取り組むことほど、この機会をピンチではなくチャンスとすることができるからです。

第3 に、京都議定書は、現在削減義務を負っている先進国だけでなく（米国の排出削減はいうまでもないことですが）韓国やメキシコなどOECD加盟国、中国やインドなど主要な大規模排出途上国にも低炭素化への取り組みが求められます。今回の会合で、そうした対話の場が確認され、今後、協議を続けることになりました。京都議定書はより広がりをもっていきましょう。

こ れらの決議をまとめて、モントリオール行動計画と呼んでいます。米国や途上国の強い抵抗にかかわらずこのように合意を進めた背景には、世界の各地で進行する温暖化の脅威があります。これからの10年～20年の取組が脱温暖化社会への道に決定的な役割をもつことの共通認識が広がってきている現れです。

し かしながら、これらの決定はすんなり決まったものではありません。最終日の翌朝午前6時前になって、ようやく、合意に至ったものです。米国、ロシア、そして日本の問題が、事態を混迷させてきたのはいつものことでもあります。特に日本政府には、まだ明確な中長期目標がありません。先進国と途上国、ロシアや東欧などが相互に信頼関係を築き、誰もが公平に削減に取り組み、温暖化の危険から子どもたちを守るために、今、私たちがやらねばならないことは、地域で脱温暖化社会に向けて確実に歩を進めていくことです。都道府県センターや推進員はその中核を担うものと言えます。

「冬の省エネ電球取り換えキャンペーン」を実施し、消費者向け学習会も行いました。

11～12月に、「冬の省エネ電球取り換えキャンペーン」を実施しました。これは、「省エネマイスター」のいる電気店の協力を得て、冬の大掃除にあわせて白熱灯を電球型蛍光灯に取り換えることをすすめるものです。(省エネマイスターについては、うぉーみんぐ6号をご参照下さい。)また、推進員の方々を講師とする消費者学習会を、府内15ヶ所で行いました。今後、メーカー・販売店の協力のもと、このキャンペーンの定量的な成果を集計する予定です。

京都府産木材認証制度に係る取扱事業者のヒアリングを実施しています。

11月から1月にかけて、京都府産木材認証制度に参画している41の取扱事業者の運営体制の確認と今後の制度の発展のための意見交換を目的としたヒアリングを実施しています。認証制度は、平成18年1月より一般建築用材にまで拡充されます。今回のヒアリングは、この新たな制度をより良いものにする検討材料として現状を把握することを目的に実施するものです。

京都環境フェスティバル2005にブースを出展し、省エネ診断などを実施しました。

主催団体としてテーマゾーンや各種イベントを企画するだけでなく、ブース出展も行いました。例年の約2倍の広さの大ブースの正面にはウォームビズをPRするマネキンを設置し、その隣では推進員さんの協力のもと参加者向けに省エネ診断や省エネ電球の実演を行いました。推進員さんの熱心な呼びかけの甲斐あって省エネ診断は大盛況で、2日間で120人を上回る参加者に省エネアドバイスを行うことができました。



温暖化対策地域力に関する地域セミナーを開催しました。

全国地球温暖化防止活動推進センターと連携し、主に都道府県センター職員を対象に「温暖化対策地域力に関する地域セミナー」を開催しました。このセミナーでは、「STEP1 センター及びセンター職員の専門性」、「STEP2 地域の人材育成」、「STEP3 京都の事例から考える温暖化対策のためのパートナーシップ」の3つのステップで、それぞれのテーマについての実践例報告をもとに活動のあり方について意見交換を行いました。



推進員研修会を実施しました。

12月11日に推進員研修会を実施しました。今回の研修は実践例報告の場と位置づけ、京都環境フェスティバル2005の会場内で実施して、一般の参加者にも推進員の活動の様子を知っていただきました。推進員からは、市民共同発電所設置運動、親子を対象とした環境工作教室、市民をまきこんだ森林保全活動、保育園でのゴーヤーを使った緑のカーテン運動などの取り組み例が写真や映像を使って報告され、府内各地で、行政や商店街などとも協力し楽しみながら温暖化防止活動が実践されていることがひろく紹介されました。

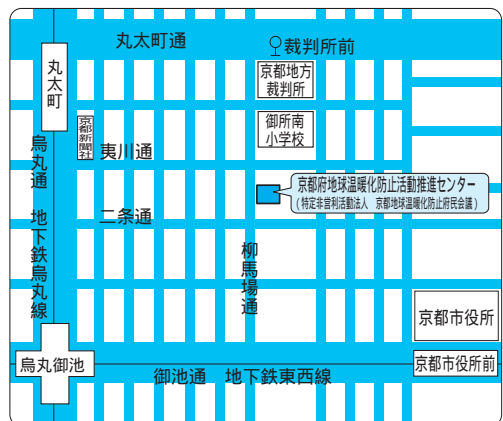
京都府地球温暖化防止活動推進センター通信「うぉーみんぐ」

i % <17 N ~ @ %17 N12 > si N4 a > s jj

発行：京都府地球温暖化防止活動推進センター
 (特定非営利活動法人 京都地球温暖化防止府民会議)
 理事長：郡 篤孝 運営委員長：浅岡 美恵
 〒604-0965 京都市中京区柳馬場通二条上る六丁目283番4
 TEL：075-211-8895 FAX：075-211-8896
 URL：http://www.kcfca.or.jp E-mail：center@kcfca.or.jp

編集：伊東 真吾 木原 浩貴 淵上 佑樹 林川 美保

法人の活動を支えてくださる会員を募集しています！
 年会費 正会員(個人)：1,000円 正会員(団体)：2,000円
 準会員(個人)：1,000円 準会員(団体)：2,000円
 賛助会員：10,000円
 詳しくは事務局までお問い合わせください。



この印刷物は、古紙配合率100%の再生紙に、大豆油インキで、風力発電による自然エネルギーを使って印刷しています

